

幼児期の音楽教育のあり方に関する一考察

吉 田 若 葉

は し が き

I 幼児と音楽の関りの現状

- 1 幼稚園における音楽過多
- 2 受け売りの指導
- 3 結果重視、過程軽視の指導
- 4 指導方法のマンネリ化
- 5 高度なテクニック志向
- 6 音色に対する配慮
- 7 マスコミ音楽の氾濫

II 幼児期の音楽教育のあり方

- 1 創造性をどう捉えるか
- 2 マスコミ音楽の利用
- 3 幼児期の音楽教育のあり方—その試み
 - (1) 情動的活動
 - (2) 身体のリズムにのった問答遊び
 - (3) ボール遊び
 - (4) 指遊び
 - (5) クレヨンのダンス
 - (6) ミュージック・メイキング
 - (7) マリオネット
 - (8) 音階遊び
 - (9) 簡単なメロディーによる創造的発展
 - (10) イメージを絵や線で表現する
 - (11) 伴奏の効果を感じさせる
 - (12) 音楽的環境における自由遊び

ま と め

は し が き

近年、大きな社会問題として、子どもの精神的な荒廃が注目されている。

人間は、多様な環境の中で様々な問題に直面し、それを克服しながら成長していく。問題の解決には、当事者の経験や知識や思考力や想像力など、あらゆる働きが用いられる。それには、幼い頃から、あらゆる能力を総合的に活用する経験の積み重ねが必要である。従って、人がこの世に生を受け与えられた賜物を十分に生かし得る創造的な教育を、親も教師も社会もすべての大人が真剣に考えていかなければならないと思う。

筆者は、幼児の音楽教育に携る者として、幼児期における音楽教育は、創造的な人間形成の一環として行われるべきであると考えている。また、人間形成における幼児期の重要性を痛感しているが、同時に、現在の幼児期の音楽教育において検討すべき問題の多々あることを感じ、創造的な音楽教育の立場から「幼児期の音楽教育のあり方」を考察してみたい。

I 幼児と音楽の関りの現状

現代の幼児が音楽とどの様に関っているのかを、日頃問題として感じている点に関して下記の7点をあげてみた。

1. 幼稚園における音楽過多
2. 受け売りの指導
3. 結果重視、過程軽視の指導
4. 指導方法のマンネリ化
5. 高度なテクニック志向
6. 音色に対する配慮
7. マスコミ音楽の氾濫

1. 幼稚園における音楽過多

幼児達が、幼稚園生活の中で耳にする音楽は非常に多い。数多い音楽に接することは良いが、音楽がどの様に用いられているかが重要なポイントとなる。

幼児を集団で移動させる時、音楽を用いると、音楽が幼児の注意を集中させ行動をスムーズにするという利点があるので、教師は非常に便利な道具として、音楽を用い過ぎてはいないであろうか。音楽を効果的に用いることにより、音楽が幼児の成長によりよく生かされることが望ましい。片付けの歌や集合の歌、朝と帰りの挨拶の歌、集団で行動する時の行進曲など、幼児が、園生活の大半をいつも同じ音楽の中で過ごすことは、音楽を音として耳にするのではなく、一種の号令のような感覚で捉えてしまう危険性はないであろうか。片付けの歌や挨拶の歌を歌うことは良いが、惰性で歌ってしまうことのないように、保育者の配慮が大切である。

音楽との出会いは、常に新鮮なものでありたい。同じ音楽を耳にしても、その時の心で音楽を感じる人間でありたい。幼児期は、感覚が著しく発達する時期である。音楽に触れる機会が多いということは、幼児のリズム感覚や聴覚を発達させるが、音楽の過剰によって、音に馴れ過ぎた無感動な幼児を育ててはならない。保育者の声に注意を集中したり、友人の話しや、美しい音色に耳を傾けたりといった注意力は、ある動作に対する一定の刺激によって育つものではない。一つの動作に対して、特定の刺激を与えることにより得られるのは、条件反射であって、集中力や注意力は、様々な機会を捉え、様々な刺激を与えることによって養われるものであろう。

保育者も幼児も音に馴れっこになってしまってはならない。

2. 受け売りの指導

保育者は、指導にあたって指導書等の内容の通りに行った結果、幼児も保育者も、その活動を

消化しきれなかったという経験が、何度かあるのではないだろうか。それは、指導書の内容の不十分さが原因の場合もあるだろうが、保育者が指導書の内容を、保育者自身の方法として消化していないことが原因となる場合が多い。指導書の受け売りばかりではなく、研究会の保育参観で学んだ方法を取り入れ不成功に終わった原因を、幼児の質の悪さで片付けたという話しも聞いたことがある。

流行の服装の中にも、着ている人のその人らしさがみられると、人の心を引きつけるように、教育も指導者自身の個性による適切な指導法が幼児の心を引きつけるに違いない。指導書は、あくまでも参考とし、指導の対象となる幼児に適した、その保育者なりの創意工夫がみられる指導が望ましい。

特に、家庭における音楽教育にも、受け売りの指導が蔓延している。ピアノやヴァイオリンのレッスンに関して、自分の子どもよりも上達している子どもの練習法や書物で読んだ練習法を無理やりさせている親は以外と多い。練習する主体である子どもに適した練習法でない場合は、十分な効果は期待できないであろう。音楽は、音楽する人自身のものであり、その人独自の音楽の世界を創り上げるには、その人に合った、その人なりの練習法を見い出していかなければならない。すばらしい才能を発揮する子どももいれば、ゆっくりと音楽との関りをもって歩む子どももいる。厳しいレッスンを受けることによって、伸びて行く子どももいれば、厳しいレッスンによって、音楽嫌いになってしまう子どももいる。創造的な人間形成の為の教育は、創造的な親や保育者の不断の努力によって可能となるのである。

3. 結果重視、過程軽視の指導

保育者は、押しつけや、教えこみの表面的な指導で、先を急ぐことがあったり又は、技術一辺倒の指導に陥ったりすることはないであろうか。

特に、楽器の演奏などには、技術優先の傾向が見られるのではないであろうか。幼児期に経験する楽器には打楽器が多く、従って演奏は、保育者の演奏するピアノ曲に合わせて、拍子打ちや、リズム打ちをすることが多い。器楽合奏に用いる曲の選曲に当って、保育者は、何らかのイメージをもって選曲をされると思われるが、保育者のイメージをどのような方法により、幼児達に伝え、演奏させるかが問題となる。保育者は、幼児の経験する音楽が音楽的成長にどの様に関るか常に考えていなければならない。幼児が曲に十分に親しむ前に、保育者のイメージによる演奏法を即教えこむのは適当ではない。それは、曲を音楽の流れとして感じとらせて、表現させるのではなく、曲をブロックのようにつなぎ合わせた捉え方をさせてしまう恐れがある。

合奏の経験以前に、十分に楽器に親しむ経験をさせることが大切である。又、奏法を正しく学ぶためには適切な指導がなされなければならない。常に、数種の楽器による分担奏ではなく、曲の流れを感じながら演奏する為にも、一曲を一種類の楽器で演奏する経験も大切なことである。その時に用いる曲は、できる限り楽器の奏法が生かされるような曲でなければならない。それは、単純な短い曲で十分である。一つの楽器には、幾つかの奏法があるが、できるだけ数多くの曲によって、様々な奏法の経験がなされることが望ましい。

保育者は、幼児に対して正しい楽器の使い方や奏法を指導すると共にその楽器の美しい音色が活かされていることを、常に気付かせるような配慮を忘れてはならない。このような経験の積み重ねにより、幼児が、曲から受けるイメージを彼らなりに表現しようとする積極的な姿勢が育ってくるのである。

合奏の場合は、保育者のイメージよりも、まず幼児自身が十分にその曲に親しむことを優先しなければならない。曲に親しむ為の方法は、保育者のアイディアにより、様々な方法が生まれるであろう。保育者は、その中から、幼児自身の発見やチャレンジを引き出し、取り上げ、曲を完成させていくといった方法が望ましい。ここで取りあげる幼児自身の発見は、当然、幼児の音楽的な成長に発展するようなものでなければならない。フレーズ、拍子、或はリズムの発見であったり、曲やリズムに対する具体的なイメージを話すことであってもよい。ひとりの幼児の小さな発見を取りあげることが、他の幼児達にとっても新鮮な発見となり音楽的成長に役立つのである。

保育者の考えに従って経験する音楽も、勿論あってもよい。それはそれで、彼らの音楽的成長に役立つものであることは確かなことであろう。しかし、少々粗雑な出来ばえであっても、幼児が自分達で作ら上げたという実感を持ちながら演奏する経験は、絶対に必要なことである。保育者にとって、幼児の自由な試みを導くことは、教えこむ指導よりも何倍も困難なことである。幼児の音楽的成長という点で幼児の成長過程に重点をおいた指導は、教えこみの指導よりもはるかに良い結果を生み出すものではないであろうか。

4. 指導方法のマンネリ化

指導方法のマンネリ化という現象は、意外と多くの園でみられるのではないであろうか。保育のプログラムが行事を中心として進められることが多く、保育者は、行事に追われているような場合がある。従って、プログラムの内容が変化しても指導方法のマンネリ化が起ってくるのである。

両親のもつ幼児観や教育観は多種多様であり、幼児達のもつ個性も多様である。保育者は、確固とした教育の理念をもって、保育にあたらなければ周囲に流される恐れがある。保育の対象である幼児は、毎年新しいメンバーとなるが、クラスの構成メンバーによって音楽に対する反応は様々である。従って、同じ曲を毎年用いたとしても当然、指導方法は変化するはずである。保育者は、幼児期に与える為の適切な教材研究を怠ることなく、個々の幼児に合った指導方法を研究していかなければならない。

5. 高度なテクニック志向

幼児が、ピアノやエレクトーンなどを習いはじめる理由として、音楽の専門家への道を目指すこと、或は情操教育としてまたは、何となく友達が習っているから、などがあげられる。その他に最近では、学習塾的な考え方が多くなってきている。以前は小学校の音楽の時間の準備としての考え方が比較的多かったが、最近では、幼稚園でのピアノ演奏に落ちこぼれない為という理由があげられる。園以外で音楽指導を受ける理由が、仲間からの落ちこぼれ防止であるような幼児期の音楽教育は検討の余地が大いにある。

幼児に音楽を経験させる方法として、二つの方法がある。一つは、テクニックの面を重視して音楽を経験させる方法であり、もう一つは、幼児の心情的な面を重視する方法である。前者のテクニック重視の考え方から言えば、訓練により回を重ねれば技術の上達は可能である。また、訓練的な指導について行ける幼児達は、それなりに音楽を楽しむこともできるだろうし、幼児同士の競争心も、レベルアップの点で十分な効果があげられよう。しかし、幼児期における音楽経験で必要なことは何かを今一度考えてみる必要がある。幼児の競争心を掻き立てて、技術を上達させ、難曲をこなさせることであろうか。メロディーの複雑で長い曲を歌わせることであろうか。長い曲に合わせて、アンサンブルを演奏させることであろうか。最近の幼児達の経験する音楽は、どんどん高度化している傾向にある。ともすると、小学一年生の音楽活動よりも高度な内容に取り組んでいる場合がある。一概に良い悪いと決めつけるわけにもいかないが、要は、指導する側が何をねらいとして音楽経験をさせ、指導される側が、そのねらいをどこまで消化し音楽的に成長したかという点が大切なのである。

指導を受ける幼児の能力も向上していることもあろうが、音楽的内容の高度化の原因は何なのであろうか。幼児期の音楽教育は将来の基礎作りの段階である。個々の幼児の発達や興味の方向など、著しく差のある幼児期における音楽教育を、小学校と類似の方法で行うことには無理がある。個々の幼児の発達に即した弾力性ある指導により、幼児が創造的な音楽的成長をするよう導くことが、保育者の使命であると考えられる。

6. 音色に対する配慮

音楽には音が付物である。保育者も親も、音色に対して如何程の配慮をもっているであろうか。楽器購入時の目安を、価格に置いてはいないであろうか。幼児であるから安価な品物でよいという理由はどこにも無い。子どもが最初に示す音楽反応は、リズムやメロディーに対してではなく音そのものに対してであるといわれる。とすれば、保育者や親が、楽器購入の際には、十分に音色を吟味すべきである。しかし、楽器店に並べられている楽器は限られており、ほとんどがカタログによる注文である。しかも、注文した品物は、返品が出来ないという現実である。従って、安価な物で済ませてしまうという悪循環となるのであって、社会全体の楽器に対する認識の向上が望まれる。

楽器そのものの質の問題の他に、保育者が、幼児に対して音色の美しさをどう感じさせているかという問題がある。音と聴覚の結びつきを、絶対音感や和音感やピッチなどの音楽的要素の面からだけでなく心情的な面からも捉えることも大切である。自己のイメージを音として表現する能力や様々な音色から広がるイメージは、日頃の音色に対する心配りの中で育っていくものである。音色に対して注意をはらう習慣は、幼児の音楽鑑賞の楽しさを増し、歌や楽器による表現活動の面に於ても、幼児に、よりよい音楽表現への積極的な姿勢をもたせてくれるであろう。

7. マスコミ音楽の氾濫

マスコミ音楽が、音楽教育問題の中に登場するようになって随分になる。

マス・コミュニケーション (mass communication) とは、新聞・雑誌、ラジオ、テレビジョ

ン、映画などを通じて広く大衆に伝達することである。マスコミ音楽は、その目的を達成すべく研究され、あらゆるジャンルの音楽として大衆に浸透してきている。マスコミ音楽の中には、勿論、すばらしい音楽は沢山ある。しかし、そのほとんどは世の移り変りと共に急テンポで我々の前を通過して行くにすぎない。

よい音楽とは、どのような音楽のことなのであろうか。大まかなアプローチは語られても、断言することはできない。しかし、よい音楽はいつの世にも伝え継がれてきているものである。

親や保育者は、マスコミ音楽に振り回されてはならない。よく問題にされるマスコミ音楽とはコマーシャルや流行歌、テレビマンガの主題歌の類であるが、最近では、至る所で聞かれるBGMもそのひとつにあげられるであろう。BGMは、本来、仕事の能率をあげたり、ムードを和げる効果のあるものとして用いられるようになった音楽である。しかし最近では、本来のBGMとしての効果より景気づけを狙うことが目的であるような騒々しい音楽も多い。音楽というより騒音に近いものであり、音に対して鈍感な人間を育てているようなものである。

BGMのように幼児が受身の立場である音楽には意外と無関心な大人達も、コマーシャルやテレビの主題歌や流行歌のように、幼児が積極的に参加する音楽に対しては割と関心が向けられているようである。

コマーシャルや流行歌が流れてくるテレビの画像は視覚的刺激が強い点で、或はメロディーがリズムカルで覚えやすいことや歌詞のおもしろさなどの点で興味をもつのであって、幼児が心から感動して楽しんでいるものではない。情緒は、満2歳頃までには、ほぼ分化するといわれているが、幼児の情緒は、持続的時間が短く、非常に強く、刺激の大小に関係なく興奮状態に達するなど、動的な要素をもつので情動ともよばれている。コマーシャルなどの音楽には、この情動を刺激する何かが、存在しているのではないであろうか。

情動的な活動とは、絵でいう“なぐり書き”の時期であり、自己表出の初期の経験である。従って、大人は無理にその活動を制止することをしてはならない。音楽に合わせて、動いたり歌ったりといった欲求を拒絶されると、積極的に音楽に取り組む姿勢が育たなくなってしまう。また、喜ぶからといって、この種の音楽のみの環境で育ってしまうと心のこもった音楽を解さない人間になってしまう恐れがある。強烈な刺激に馴れてしまうと静かな地味な印象の音楽を受け入れることに物足りなさを感じてしまうようになる。感覚の著しく発達する幼児期に強烈な印象にのみ反応することは、音楽に対して鈍感な人間になるだけでなく、余程強い働きかけでない限り、物事に対して受身的な姿勢の人間となってしまう恐れがあるのではないであろうか。

この種のマスコミ音楽から、幼児を分離することは不可能なことである。特に、集団生活に入る以前の幼児達の音楽経験は、ほとんどがマスコミ音楽によるものである。従って、特に親は、できる限り幅広い分野にわたるマスコミ音楽をうまく利用し、受身的な姿勢でなく積極的に参加させ、消化し発展させるよう導いてやらなければならない。

幼稚園においては、コマーシャルや流行歌の様に幼児の情動を刺激するような活動が、十分にプログラムの中に取り入れられているであろうか。集団生活に入ったとたんに堅苦しい音楽活動

で音楽をさせられたのでは、幼児にとって家庭での音楽と園での音楽が分離してしまう結果になりはしないであろうか。十分に情動を刺激するような活動を経験させながら、序々に情操的な面へと移行していくのがよいと考える。マスコミ音楽の渦中にいる幼児に対する、保育者の音楽指導の工夫が望まれる。

II 幼児期の音楽教育のあり方

Iにおいて、現代の幼児と音楽の関りの現状に関して考察を行ってきた。本章においては、Iの問題を踏まえ、筆者が指導の現場において行ってきた試みを例にあげながら「幼児期の音楽教育のあり方」を考察してみた。

1. 創造性をどう捉えるか

最近、「創造性の育成」という教育目標は、教育全般における課題となってきたが、音楽教育でも同様の傾向がみられる。しかし、教育現場において、指導者自身が「創造性」に関して、消化不良である為に指導効果が十分に得られないという問題も多い。

創造 (creation) とは、新しいものをはじめて造ることである。創造性 (creativity) とは、創造する力やはたらきのことであり、創造性のある人とは、自己の心を自分なりの方法で表現できる人といえよう。

創造性とは、すばらしい芸術作品を作り出すような特別の才能ばかりをさすわけではない。マスローは⁽¹⁾、創造性を「特殊才能の創造性」と「自己実現の創造性」、或は「社会的立場で見た創造性」と「個人的立場で見た創造性」というように、創造性を二つの立場から考えている。幼児期は、人間形成の基盤を作り出す時期であり、将来、彼らが発揮するであろう能力は十分に出し尽くされていない時期である。従って、幼児期における教育は、「自己実現の創造性」の育成を第一の目標として掲げるのがよいと考える。人間は、生活の中で様々な創造性を発揮する。毎日の服装や部屋のインテリアを考えること、絵を描いたり、歌を作ってみたりすること、あるいは身近に起こってくる問題を解決する力も、創造性によるものである。従って、創造性の育成は、すべての人間になされなければならない教育といえる。

では、創造性はどのような過程を経て育つてゆくものであろうか。マッケラーは⁽²⁾、「創造的な思考でも、実は、無意識のうちに誰かのアイデアを用いている。夢の中で考えたようなことも、独創的な発明や芸術の創作も、いつか経験した知覚から生まれたものだ。独創とは、このような知覚の関係づけ、再構成、結合などから生まれたものである。」と述べているが、経験した知覚により、想像し、考え、感じ、行動していくことが創造であるといえる。従って、創造性の育成のためには、あらゆる機会を捉えて想像し、考え、感じ、行動する習慣を育てていかなければならない。

それは、音楽教育においても同様である。創造とは新しいものを作り出すことであるが、それは価値あるものを作り出すことである。音楽教育は、情操教育といわれるように高次元の感情へ

注 (1) 音楽之友社、木村信之著「創造性と音楽教育」p. 36, 37 参考

(2) 音楽之友社、木村信之著「創造性と音楽教育」p. 39 参考

と導いていかなければ創造性は育たない。

音楽の表現においては、「模倣は創造のはじめ」などといわれるように、模倣学習も創造的な活動へ発展させる為のものであることを保育者は、認識する必要がある。模倣学習を単なる模倣で終わらせないような配慮が常に必要である。それには、模倣学習の中にも幼児の自発性を表わす余地を残しておくことである。

幼児の自発的な活動であるか否かは、学習の効果に非常な影響を及ぼすものであり、次の学習に対する積極的な姿勢を生み出す鍵となる。幼児の積極的な活動への参加が創造への力を幼児の中に序々に作り出して行くのである。

2. マスコミ音楽の利用

本稿 I の 7 で述べたように親や保育者は、マスコミ音楽に振り回されることなく大いに利用することである。特に家庭においては親のアイディア次第で、音楽的プラスの方向へ導くことができる。

コマーシャルのメロディーには、非常に覚えやすく歌いやすいものが多いので、替え歌にして一緒に歌ったりするのも一案である。幼児の様々な行動を捉えて歌ってやるとよい。これは、歌作りの第一歩を踏み出したといえる。そのうち、親も子もコマーシャルのメロディーではなく、簡単なメロディーぐらいは作れるようになるに違いない。

好きなテレビ番組の主題歌を歌う時の幼児はすばらしい歌手に変身する。歌詞やメロディーを正確に表現し、目は生き生きと輝き、リズムにのって全身で歌って表現する。振り付けしながら歌うことも多い。これは、第一に大好きな番組に出てくる歌であること。第二に、番組に接する度耳にしている、自然とリズムや音程を感覚的に把握していること。第三に、いつも接している番組の内容を表現した歌であるので、歌いながらイメージがわき、心から歌えること、などがあげられるのではないだろうか。これは、歌う側の理想的な姿といえよう。ただ、歌の内容がもう少し考慮されていればと思われることも多いが大いに歌わせてやればよい。なぜならば、彼らが経験する歌はそれだけではないのであるから。

テレビ番組のBGMとしての音楽には、非常に効果的な楽器の使い方をしてあることが多い。「おもしろい音楽ね。」「あの楽器は何かしら。」など、子どもと一緒に耳を傾ける時をもつのもよい。この様に発見の目や耳を働かせることにより、幼児には、「音さがし」や「リズムさがし」あるいは「替歌作り」などの遊びとして、マスコミ音楽との接触をもたせるとよい。

音楽番組として放送される音楽会の中継などは、できる限り親子で鑑賞する機会をもつとよい。しかし、生演奏を鑑賞する場合よりも、テレビに対してはそれほど集中できないようである。

マスコミの子ども番組でよく歌われる歌などを、幼稚園で取上げる時は十分に検討する必要がある。幼児が好むという理由から、即、その曲を教材とすることは避けなければならない。幼児の好む曲を取上げる場合は、その曲のどこに幼児を引きつけるものがあるのかを検討しなければならない。幼児が音楽的に成長するための経験でなければ、単なる暇つぶしにすぎない。保育者のなすべきは、マスコミから流れてくる歌以上に幼児が心から歌える曲を準備してやることであ

る。

3. 幼児期の音楽教育のあり方—その試み

幼児は、内的反応をうまく言葉で表現できないので行動で示すことが多く、幼児の発達においては、情動が重要な役割を果す。十分に情動的な活動を経験させることにより幼児の情緒の安定をはかることが必要である。音楽教育においても同様のことが言えよう。所謂、音楽的な活動をする以前に十分な情動的反応による音楽活動をさせることが大切であると考えられる。つまり、美しい音色で演奏したり、曲想に合った表現で踊ったりする以前に自己を表出する楽しさを知らせるのである。

まず、内なるものを表出させ、それらが如何にすればもっと正確に、豊かに表現されるかという成長の過程に、保育者は指導の重点をおかなければならない。

保育者は、とにかく表面的な形を整えたがるが、内身が成長するに十分な栄養分を蓄える前に外見を整えることに精力を投入することは無意味なことである。つまり、レディネスにそって、学習を進めることが望ましいということである。マーセルは、「音楽のどの分野を勉強するにしても、それに要する本当の準備は、継続的な音楽的成長、すなわち、音楽に反応する能力が育っているということである。それさえ育っていれば、音楽のどの学習分野においても必ず成功するのである。」⁽³⁾と述べているように、幼児期の音楽教育において、このことは最も重要なポイントであると考えられる。

保育者は、レディネスが自然と成熟するのを待つだけではなく様々な音楽的要素に反応できるような刺激を準備し、学習できるチャンスを与えることによりレディネスを作り出してやらなければならない。その為に保育者は、個々の幼児の発達と興味を十分に理解しなければならないし、保育者自身が音楽性豊かであり音楽に対する研究を怠ってはならない。

次に、筆者が幼児の音楽指導の中で行った試みをいくつかあげてみたい。

3-1) 情動的活動

前述したように幼児には、まず情動的活動をさせることが望ましい。リズム経験は身体の筋力的経験であるが、大筋運動の支配的である幼児期は、リズム感覚を養うのに最も適した時期である。従って情動的活動として身体的反応による活動が最も適しているといえる。

思切り床を叩いたり、床を踏みならしたりしている時の幼児の顔は、満足そうで目は生き生きと輝いている。最も原始的で騒々しい活動の繰り返しの中から、次第に正確なリズムを表現するようになり、同じリズムの繰り返しの飽きてくると、そのうち幾つかのリズムの組み合わせによるパターンを発見していくようになる。幼児の方からリズム変化の発見がなされない場合は、幼児の規則正しいリズムに重ねて、保育者がリズム変化をつけてやればよい。この方法は正確な拍子の波に乗ってリズムが流れていくことを自然のうちに幼児に感じさせることができるよい方法である。

注 (3) 音楽之友社 ジェームス・マーセル著 美田節子訳「音楽的成長のための教育」p. 74 参考

リズム感を養うために、保育者の側からリズムパターンを与えて練習させることも必要であるが、幼児自身によるリズムの発見の経験は必ずさせるべきである。自分自身をコントロールする力は、他から強制されて付くものではなく自己の体験により養われるものである。従って、最初は粗雑なものであっても、リズムに乗る楽しさを発見すれば、やがては高度な音楽に反応する基礎となるのである。

床の他にボンゴや太鼓を自由に打つこともよいし「クシコス・ポスト」のように軽快な曲に合わせて自由にかけ回るのも一つの方法である。

3-(2) 身体的リズムにのった問答遊び

この遊びは、幼児にリズムに乗る楽しさを体験させる為の遊びとして、試みたものである。2人向いあって両手を交互に横に振り、左右で2拍子のリズムをとる。左右交互が無理な場合は両手を横に広げたまま上下で1拍として行うのもよい。幼児が遊びに馴れるまでは、保育者と幼児1人ずつ交代で行う方がよい。テンポは、勿論、幼児が最もとりやすいテンポでなければならない。手の動きと同時に、2拍の中でことばを発しながらリズムに乗らなければならないので、少しゆっくりめのテンポの方がよい。

2拍子に乗って問答することばは、「やさいのなまえ」「さかなのなまえ」「動物園にいるもの」「お友達の名前」など、幼児が頭にうかびやすいものがよいが、保育者は、幼児がうまく2拍子の流れに乗るよう誘導してやらなければならない。「しりとり遊び」にしてもよいし、ことばがつかえた時、他の幼児と交代する方法もよい。

隊形は、保育者と向い合って幼児が一列になったり、クラス全体で輪を作って行うのもよい。

手の振りに馴れたら、足を交互に動かして拍子をとってするのもよい。その活動は、足踏みでもよいし、少しジャンプするようにすると全身でリズムを感じることができてなおよい。しかし、ジャンプによって片足で体をささえながら2拍子のリズムに乗るのは、筋力の未発達な幼児にとっては、少々大変な活動であるので無理にさせない方がよい。足による2拍子が不安定な幼児には、「ケン・パ」で行うと、足の動きも楽に活動できる。「ケン・ケン・パ」ですると3拍子もできる。

(幼児による創造的發展)

最初は、ことばも出にくいが馴れてくると、ことばをリズムに乗って発することができるようになり積極的に活動するようになる。そのうち、単語だけでなく、会話もするようになってくる。拍子に乗ってことばを自然な形で表現していくことは、歌を作る時に大いに役立つであろう。手足以外に、太鼓や拍子木、カスタネットなど、奏することに気をとられず、しかもリズムが明確に響く楽器を用いてやると、更に音楽的な雰囲気が出て楽しくなる。

3-(3) ボール遊び

音楽において、テンポは重要な表現要素である。ピアノを弾いている小、中学生の中で曲のテンポに対する感覚の非常に悪い子どもは、まりつきが苦手であることが多い。ダルクローズは、テンポ感を養うには、リズムカルな体験に加えてタイミングの体験が必要であると述べている。木を

楽譜 1

まあるいボール

早川史郎 作詞
作曲

1. くるくるくるくる ほん くるくるくるくる ほん まわって まわって
くぐれ くぐれ
3. ころころころころ ほん ころころころころ ほん

2. ひゆる ひゆる ひゆる ひゆる ほん ひゆる ひゆる ひゆる ひゆる ほん
とばせ とばせ そらたかく まあるいボール ひゆる ひゆる ひゆる ひゆる ほん

指導のポイント

- ① ボールの動きを観察する。
- ② 観察した動きを言葉や身体表現で表現する。
- ③ フレーズを感じとってボールを操作する。

活動

- ① 教師が、1 題目と 3 題目の歌詞のようにボールを操作してみせる。
- ② ボールの動きを観察し、言葉で表現してみる。
- ③ ボールの動きを身体的に表現してみる。
※自由に表現した後「くるくるくるくるほん」のリズムをピアノで弾いてやり、自然とピアノのリズムに合った動きをするよう導く。
- ④ 1 題目を歌いながらボールを操作する。
※フレーズごとにボールの動きをとめるよう指導する。
- ⑤ 3 題目の時は、2 人向いあって行ってもよいし、1 列になってトンネルをつくってボールを送る方法もよい。
- ⑥ ボールを上げて受取れる子供達には 2 題目の歌詞で活動する。

指導法

- ex, 1) フレーズを感じさせるため、ボールを 1 フレーズごと止めさせるが、最初はどこで止めたらよいかを子供達から発見させる方がよい。
- ex, 2) ⑤のトンネルの人数は、1 フレーズでボールがころがせる人数でなければならない。

切ったり、釘を打ったり、重い物を押したり引いたりするのを真似ることもよいし、ボール投げや棒を振る真似をするのもよいと述べている。

音楽をリズムカルに表現するには、技術的なことを学ぶ以前に、身体の内よりリズムを感じることができなければならない。4歳になると運動神経が発達するようになるのでボール遊びを大いにさせることは、運動能力の発達にもよく幼児がリズム感覚を養うには適した遊びといえる。

ボールをつくまでには、ころがしたり、投げたりして、手をボールに馴れさせることが大切である。ボールと自由に遊ぶプロセスを経ないで、ボールつきに入ることは、ボールに対する構えを幼児にもたせることになり、のびのびと活動することができず、かえって劣等感をもたせる結果にもなりかねない。

ボールをつく段階に入っても、最初からつけない幼児に対しては、保育者が少し手伝ってやるとタイミングを早くマスターできるようになる。「1・^{ワン}・^{ツー}2」のリズムに乗って1回つき、両手で受け止めることの繰り返しや保育者とのボール問答をすることもよい方法である。最初は1回ついて交代し、序々に2回、3回とつく回数を増やしながらタイミングを体得させていくとよい。

ボールと遊ぶ活動の中では、ボールを投げたり、受けたりして身体の緊張をとり、身体を柔軟にしてタイミングの体験をすると共にボールの様子をことばで表現してみたり、ことばに合わせてボールを操作したりといった創造的活動も並行すると、ボールに対する愛着もわきボール遊びが一層楽しいものとなる。

(まあいボール)ー楽譜1

この曲は、ボールをつく以前の段階でボールと親しむ為^にに選曲して遊びの方法を工夫してみたものである。遊びの為の曲ではないが、ボールの動きを観察し、それをことばで表現することや観察した動きをことばや身体活動による表現へ発展できること、また、フレーズを感じとってボールを操作しやすいなど、幼児の創造的な活動に発展しやすい点により選曲した。

ボールの様子をことばで表現して歌うことは、メロディーと、ことばの一致について気付かせることができ、ことばに合わせてボールを回してポンと止める活動は、歌詞がリズムと一致することの楽しさを感じとらせることができる。さらに、「めがまわる」ボールの様子や「トンネル」をくぐらせるにはどうするかなど、幼児のイメージを実物により実現できる楽しさもある。

フレーズを感じとるにも、2小節と4小節のフレーズを、ボールの操作によりコントロールして把握することができる。とかく幼児はリズムに気をとられて、フレーズとして捉えることをしないが、この場合はボールが曲に乗ってくれているので、フレーズをはっきりと把握することができる。

この遊びから発展して、ボール以外のものの動きにことばを付けたりしながら、歌の創作へと導いていくこともよい。

3-(4) 指遊び

幼稚園では、指を使った遊びが多い。指の発達は、2歳頃で絵本を1ページずつめくることができ、3歳になると親指から小指にかけて順序正しく屈曲できるようになるという。5歳になれば、両手同時に親指から小指に屈曲して、小指から親指にかけて伸ばすことができるようになるといわれている。従って、幼児期、特に3、4歳頃に指遊びを大に行なって発達を助長するとよい。

指遊びには、ほとんど歌がともなっている場合が多いが、リズムカルなことばやメロディーに合わせて、手や指の運動を助長し、保育者や幼児による創造的な発展の試みによって一層、遊びを楽しくするとよい。

(ゆびのおさんぽ) - 楽譜2

この曲は、筆者がお風呂で子どもの身体を洗いながら作ったものである。その時の歌詞は、「一君のおなかを パパンパン ママのおててで……」となっていたが、幼稚園で用いるゲームとして作りなおしてみたものである。

幼児は、自分の身体に対して大変に愛着をもっているものである。身体の一部をリズムカルに打って、そこから次のところへ移動するといった単純な動きであるが、大変うれしそうに、しかも、てれくさそうにする幼児が多い。替歌にして、指の動きを表現することばのおもしろさも十分に楽しむことができる。手の開き方、指の形なども、歌詞に合わせて考えるとおもしろい。

3-(5) クレヨンダンス - 楽譜3

最も単純なパターンの構成要素で作られた音楽の表情を幼児が感じとり、それを様々な方法で表現することを、ゲームとして気楽に楽しみながらできるようにとの考えから、作曲してみた。音楽の表情を感じると同時に、音に対して集中する姿勢を養うこともねらいとした。

クレヨンによる線画の活動の時は、紙を床に置いてすると気分的に自由になるような気がする。好きなクレヨンを手を持って、リズムカルに楽しい感じで歌うこと、ピアノの音がとまったら、手の動きもとめることを注意して何度も繰り返し活動すると、次第に曲の感じに合った模様を書くようになる。

発展的な活動として、身体や打楽器で表現してみるのもおもしろい。その時は、歌詞も当然替えなければならない。身体表現の時は、「みんなが おどりだす みんなが おどりだす すてきなダンスおどりましょうか」、具体的なイメージをもった表現の時は、「だれが おどりだす だれが おどりだす どんなダンス おどるのかしら」打楽器の時は「がっきが うたいます がっきが うたいます すてきなおとで うたいます」という具合に替えるとよい。

(幼児の創造的発展)

想像性豊かな幼児達は、いろいろなものを踊らせることができる。指、足、首、おしりなどの身体の部分であったり、路上で見つけられる石や小枝であったり、クレヨン以外のマジックやえんぴつなど、目につくものを何でも踊らせるようになった。踊る時の3種類のパターンの音楽も、「ララララ……」や「ターンタ」や「タンタン……」など、リズムに合った表現の音を発して歌うようになった。

楽 譜 2

ゆ び の お さ ん ぼ

吉 田 若 葉 作 詞
作 曲

軽 快 に

指 導 の ポ イ ン ト

- ① 体の部分の名称をおぼえる。
- ② リズムにあわせて、体の部分を打ちながら楽しむ。

活 動

- ① () の中は「ほく」「わたし」や自分の名前をいれてうたう。
- ② おなかは、ひらいた手のひらで打つ。
- ③ 「くるくる……」のところは、指1本でまわりながらおへそへ行く。
- ④ 2題目は、ずっと指1本で行う。

指 導 法

- ex, 1) 「ひらいたおてで」は、おもいきりひらかせる。
- ex, 2) | ♩ ♩ ♩ ♩ | のリズムと | ♩ ♩ ♩ ♩ | ♩ ♩ ♩ ♩ | のリズムをとりあげて、床やひざ打ちなどするのもおもしろい。
- ex, 3) 替歌にして、部屋のいろいろな場所を打ちながら歌うのも楽しい。
- ex, 4) 4拍子にならないよう。2拍子として子供達がとらえるような歌い方をしなければならない。

楽譜 3

クレヨンのダンス

吉田若葉 作詞
作曲

The first system of the musical score is in 4/4 time. It consists of a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line begins with a whole rest, followed by a melody starting on a dotted quarter note. The piano accompaniment features a steady eighth-note bass line and chords in the right hand.

The second system continues the vocal melody and piano accompaniment. The lyrics "クレヨンが おどりだす クレヨンが おどりだす" are written below the vocal line. The piano accompaniment maintains its rhythmic pattern.

The third system continues the vocal melody and piano accompaniment. The lyrics "どーんなせんが できるでしょう か" are written below the vocal line. The piano accompaniment continues with its characteristic eighth-note bass line.

The fourth system is a piano solo section marked "1 Con moto" and "a mf". It features a complex, flowing melody in the right hand and a supporting bass line in the left hand.

The fifth system is a piano solo section marked "2 Elegante" and "b mp". It is in 3/4 time and features a more static, chordal texture in both hands.



指導のポイント

- ① 音に対して集中する姿勢を養う。
- ② 耳にしたリズムやメロディーを線画として表現する。
- ③ ピアノの音がとまったら手をとめる。

隊 形

机あるいは床に紙をおいてクレヨンで書く。
 ※床の方が気分的に自由になる。

活 動

- ① 全員で歌をうたう……たのしそうにリズムにのってうたえるよう。
- ② ①・②・③の時、ピアノに合わせてクレヨンを動かす。

発 展 1

(身体的表現)……①②③を身体で表現する。

※歌 詞→みんなが おどりだす みんながおどりだす すてきなダンスおどりましょうか

※表現予想-①回転・小走り。②ゆれる、大きく回る。③ジャンプ。

発 展 2

(身体的表現)……①②③を具体的なイメージをもって表現する。

※歌 詞→だれがおどりだす だれがおどりだすどんなダンスおどるのかしら

※表現予想-①みつばち・リス・ヘビ。②ちょうちょ・魚。③ぞう・くま・ライオン etc

発 展 3

(器楽表現)……①②③を打楽器で表現する。

※歌 詞→がっきがうたいます がっきがうたいます すてきな音でうたいます。

※表現予想-①木琴・スズ・タンブリン。②バーチャイム・スズ・トライアングル。③ウッドブロック・たいこ。

3-(6) ミュージック・メイキング

これは、音色とイメージの結合によるリズム表現である。

国安愛子氏は、リズムに関して次のように述べている。「メロディーや和声のない音楽はあり得ても、リズムのない音楽は存在し得ないという意味で、リズムは音楽の原要素とされている。……メロディーや和声は、音素材の不可分のものであり、音楽を離れては存在しない直接性、限定性をもつものに対し、リズムは、大自然や生物の営みに至るまで、広く存在する“超音乐的”な現象である。……⁽⁴⁾」

大昔の人々は、ことばの代りに音によって意志を伝達したという。しかも、伝達の内容によりそのリズムも異っていたという。そのうち、人間は感動を歌や楽器や踊りによって表現するよう

注 (4) 北大路書房、国安愛子「リズム教育」p. I

になってきたのである。この様な人間の歩みを考えるに、現代の豊富な音楽環境の中にある我々にとっても、原始的なリズムによる表現の体験は、重要なものであるように思われる。本稿により前述した情動活動がそれであり、ミュージック・メイキングは、情動的な活動をもう一步進めてリズムによる語りかけを試みる方法である。

自分のイメージに合った音色や、リズムを発見したり音色をきいて連想したことを表現するなど、最初は簡単で短い表現から始めて行くとよい。彼らが経験して行く音楽活動の広がりと共に、ミュージック・メイキングの内容も次第に広がりを見せてくれるようになるであろう。

(幼児による創造的發展)

まず、打楽器の音色から連想したものをリズム表現してみる。(1部紹介)

タンバリン (風の音)	tr	~~~~~
(花火の音)	♪♪♪♪	♪ sf.
マラカス (あられ)	tr	~~~~~
フィンガーシンバル		
(星)	♪	♪
(風鈴)	♪♪♪♪♪	
ギロ (カエル)	ノ	
(木戸のあく音)	ノ	
タイコ (雷)	~~~~~	♪ roll sf
ウッド・ブロック (馬)	♩	♩ ♩ ♩ ♩

(4歳児3名の活動)

A(男)ハンドドラムとタンバリン大、中、小の4個の楽器を床に並べ、太鼓のマレットを両手に持ち、ライオンの音を出す。「いまから、うさぎを捕まえに行くぞ。」と言って、4個の楽器をマレットで打ち始める。

B(女)「私は、うさぎよ。」と言って、ステップベルを持ってくる。「近くに教会があるの。」と言って、トライアングルを打つ。「うさぎさんが遊んでいるよ。」と言って、ステップベルの階段を自由に上下して奏する。

A 大きく速く打ちならし、「ウォー」と大声を出す。

B 「キャー」と言って、ステップベルの階段をグリッサンドで下りる。

C(男)「ぼくは、カエル。草のかげにかくれてる。」と言って、ギロをならしながらピアノの下へもぐっていく。

B 「カエルさん助けて」と、ステップベルを持ってピアノの下へ逃げる。

この活動のパターンが何度か繰り返されると、Aはライオンになって歩き出した。

C 「ぼくが、ならしてあげる。」と言って、Aの動きに合わせてタンバリンとハンドドラムを打ち始める。

B 適当に遊んだり、逃げたりの音を出している。

AもCも、すっかりライオンになりきって、歩く、飛ぶの動作と楽器の音の強弱がピッタリと合うようになってきた。この活動は、なかなか終わらず、AとCはビッシヨリ汗をかきはじめる始末であった。

これは、ミュージック・メイキングに、ことばや動作もプラスされた活動となったが、幼児期のこの様な経験は非常に尊いものである。常に保育者は、幼児の想像力を刺激させ、創造的活動に積極的に取り組む姿勢と喜びを知らせてやらなければならない。

3-(7) マリオネット-楽譜 4

この曲は、「オルフによる音楽教育」の中の「マリオネット遊び」をヒントとして、幼児がマリオネットになる楽しさと同時にピアノや打楽器の音色やリズムをよく聞き、身体活動することにより、筋肉の緊張や弛緩をすることを身につけるように作ってみた。ト長調の音階になっており、音の下降と共に動作も下降させ、身体によって音高感を感じとれるようにした。筋肉の緊張と弛

楽 譜 4

マ リ オ ネ ッ ト

吉 田 若 葉 作 詞
作 曲

ほく は マ リ オ ネ ッ ト ほ そ い い と で う ご き ま す う ご き ま す

手拍子

GAME 2 動作

① (手首) ② (肘) ③ (肩)

GAME 1 A (ギロ タイコ)

GAME 2 動作

④ (首) ⑤ (上半) ⑥ (腰) ⑦ or ⑧ (カウベル)

GAME 1 B (ギロ タイコ)

緩の経験は、身体的発達にもよい経験であるし、音楽の面では踊りや楽器の創作の際に役立つであろう。

指導のポイント

- ① マリオネットの特徴をとらえて身体表現する。
- ② 4拍子を感じとらせる。
- ③ 身体の一部の筋肉を緊張、弛緩させる。
- ④ ピアノあるいは打楽器のリズムに合わせて動く。

活動 GAME 1

- ① ギロ・カウベル奏者、タイコ奏者と身体活動A、Bにわかれる。
 - ② Aがギロのリズムにあわせて動き、タイコの音でそのままの動作で静止する。
 - ③ Bがギロにあわせて同様にする。
 - ④ カウベルの音でABとも身体を楽にして歌をうたう。
 - ⑤ A、Bの順序を交代して行う。
- ※②の時、Bは手拍子を打ってもよい。

GAME 2

- ① 打楽器を8種類準備し、A~Hの動作と共に楽器も変化させる。
- ② 手拍子で歌ってから、打楽器のみの伴奏でA~Hの活動をする。

指導法

ex, 1) GAME 1、2ともに、ピアノ伴奏による、拍子打ちになれてから、打楽器だけの伴奏にする
とよい。

ex, 2) 実際のマリオネットをみせたり、写真をみせたりして十分にイメージをもたせてから活動する
とよい。

発展

- 1 ローデ作曲『マリオネット』を教材として
 - ① 曲に親しみながら自由な身体表現をする。
 - ② 楽器あそびをする。
- 2 マリオネットの製作をする。

打楽器を用いる前に、ピアノ伴奏のみで行う方がよい。また、歌の時に手拍子をつけると、楽しく活気のある雰囲気となる。前奏がなく、入りにくい場合は、保育者の指揮を見る体験もよい。指揮をみながら、歌の前に手拍子を1小節いれると、更に楽しい雰囲気になると同時に揃って歌い出せるというプラスもある。

(幼児による創造的発展)

GAME 2の、力を抜いて最後に床にボタンと座込むところが、何度やっても楽しいようで、人気のある活動となった。

GAME 1において、マリオネットの知識はあっても、それを表現しようとする、できずに立っている幼児がほとんどであった。そこで、実際に紙粘土で作ったマリオネットを見せ、実物を見ながら、まねっこ表現を展開していった。曲に合わせて幼児がマリオネットを操作し、他の幼児がそれを真似て表現するのも大変喜こんでした活動のひとつである。

ローデー作曲「マリオネット」による、身体表現や楽器演奏は、時間をかけて幼児が十分に曲に親しむことが必要である。曲にあわせて線画表現やイメージを絵に描くことも、曲に親しみ、

音楽的要素を感じるためのよい方法である。

3-8) 音階遊び

音階は、音楽を作る源になっているものであるから、幼児期において、何らかの形で音階に対する知識をもつことはよいことであると考えられる。幼児期における音階への知識は、読譜という知的な理解よりも感覚的に把握する段階にとどめるべきである。しかし、楽譜に対して、興味を示す幼児がいる場合は、勿論、答えてやらなければならない。

筆者が、音階遊びに用いる教材にステップベル（階段になったサウンド・ブロック）がある。これは、音の高低が視覚と聴覚から、同時に把握できるという利点がある。

音階遊びを通して、幼児のメロディーの創作に対する興味と、メロディー楽器を演奏することへの積極的な姿勢が育つことをねらいとして行っている。

保育者が、即興的に階名で歌いながらステップベルを弾き、幼児が模倣して歌うという方法で行う。その時、マレットに紙に書いて切抜いた小人の人形などを貼りつけるのもよい。幼児は、音の階段を踊っている人形に対して非常に親しみの気持ちもち音階遊びに対してより積極的になる。

階名で歌うことに馴れてきたら、実際の階段を使って、幼児自身がマレットになって遊ぶ。この場合、正確なリズムをとる為に、続いた音の動きでなければならないのが物足りないが、身体を使って高低を把握できること、身体のリズムと共に歌うという利点もある。

まず、保育者が、ステップベルで「ドレミファソソソ ソファミレドド」などを弾く。幼児は、歌いながら階段を上下する。次に、同じメロディーに「おなかですいた おやつをください」などと、ことばをつけていく。更に発展させて、「あなたのなまえ おしえてください」「ぼくのなまえは ○○ですよ」などと、問答遊びをしてもおもしろい。幼児が自由に階段を動くのに、保育者がステップベルで音を出してやることもよい。この遊びはメロディーを作ったり、それにことばをつけることが、それ程難しいことではないという気持ちを幼児に感じさせることができる。

楽 譜 5

この楽しさを経験した幼児は、ピアノや木琴などに向った時、自由にメロディーを作ってみたくなるにちがいない。できたメロディーの上手、下手よりも、幼児が自己表現のひとつの糸口を見い出せることが非常にすばらしいことであるといえよう。

3-9) 簡単なメロディーによる創造的発展

これは、3-8)からの発展的な活動として取りあげたものである。簡単なメロディーを階名で歌うこと、メロディー楽器で演奏すること、ハーモニーを感じとらせることをねらいとして選曲を行っていく。

楽譜-5は、ツェルニー100番の10番の1小節から16小節までのうち、15、16小節を変えて用いたものである。

活動としては、まずメロディーに親しむこと。その方法として、「ラ」や「ア」など幼児が自由に音を選んで歌っていく。幼児は、いろいろな音を変えて歌うのを楽しみながら、いつの間にかメロディーを覚えてしまう。更に、保育者が歌う階名にあわせて繰り返し歌ううちに階名でも歌えるようになってくる。

この後、和音笛、T(主和音)、D(属和音)、S(下屬和音)の三種類を用いて、メロディーと調和する和音を幼児自身で発見させる為、比較学習によって進めてゆく。T、D、Sは色により区別してあるので、幼児は色と各響きを結びつけ把握してゆく。16小節につき、3和音ずつ、つまり48回も和音の響きを耳にする間に、幼児は、相当和音をききわけることに馴れてくる。次に、保育者がメロディーをピアノで弾き、伴奏のT、D、Sを3名の幼児で担当するアンサンブルへ発展させていく。覚えられない幼児がいる場合は、保育者の指揮によって進めてもよいし、あるいはピアノも指揮も、できる幼児に担当させることもよい。メロディーをフレーズ別に担当させてピアノで演奏するのもよい方法である。ミュージックベルとグロッケンによるアンサンブルもピアノと和音笛とは異なる音色によるハーモニーの経験ができる。

楽器遊びによって、メロディーに十分に親しんだ後は、詩をつけて歌作りにも発展できる。「すみれのはな きれいにさいている ちょうちよが あそびに とんできたよ」「ポーポーポー きしゃ どこまで はしってく おきゃくを のせて まちから まちへ はしってく」「のはらで うさぎが ピョンピョン はねている カエルが かわから ピョン ピョン はねて やってきた」「ランランランラン みんなで あそぼう きつねも うさぎも なかよくあそぼう」「なわとび トントン トトト とんでいる おとこのこと おんなのこが たのしそうにとんでいる」以上は、幼児が作った詩である。この曲は、音階遊びよりも長いので、最初は、なかなかことばが出てこない幼児が多かった。そこで、目を閉じてピアノ演奏による曲を何度も聞かせた。保育者は、「楽しい感じ、それとも悲しい感じかしら。」とか、「どんな楽しいことがうかんできますか。」あるいは「伴奏をよく聞いてみましょう。」など、質問によって誘導してやるとよい。汽車や、なわとびの詩が出たのは伴奏からうけるイメージなのである。1人で作れない幼児が多い場合はグループに分れて考え、グループごとにできた作品を歌って発表するという試みもおもしろい。グループ間の連帯感や発表することに対する緊張感と誇らしい気持をもつなど

の副産物もある。その時の伴奏は、楽譜－5の和音の他に分散和音による2、3種類を準備しておいて、幼児に自分達の作った歌詞に合った伴奏を選択させると、伴奏の効果についても気付かせることができる。

3-(10) イメージを絵や線で表現する

視覚的な教材によって、歌や曲の情景を示すことは、音楽をする主体である幼児のイメージを限定してしまう恐れがあるので、どの様な曲にでもこの方法を用いることはできない。しかし、曲の内容によっては、視聴覚教材を用いる方が、幼児のイメージの広がりを助ける場合もある。

幼児の受身的な視聴覚教材ではなく、幼児自身がイメージを絵に描いて表わす方法もよい。これは、曲に対して親しみをもつと同時に、曲を自分なりに解釈しようとする姿勢を養うことができる。

曲のイメージをクラス全体で話し合ったり、それを保育者が、幼児の前で絵に描いてやることもひとつの方法である。歌唱指導の時などにこの方法を用いると、クラス全体のイメージがひとつになっているので、まとまった雰囲気を作り出すことができる。クラス全体が、まとまった機会を捉えて、曲の感じを出すにはどの様に歌うかなどを話し合いながら、音楽的な要素や発声法に関する認識をもたせるとよい。

また、レコード鑑賞の折に、曲に合わせて自由に線画を書いたりイメージを絵に描くこともよい。この方法は、音楽に耳を傾ける習慣をつけるのによい方法であるように思われる。

(レコード鑑賞における、幼児の創造的発展)

本稿3-(5)の「クレヨンのダンス」においても、線画を書いたが、この場合は単純な構成による音楽である。レコード鑑賞の場合は、まとまりのある長い曲であることが多い。従って、幼児のイメージも豊かに発展できる。

線画を書かせると、そのおもしろさも手伝って、何度も同じ曲をききたがる。最初は、いいかげんな表現であったものも次第にフレーズを感じて手を動かしたり、強弱も聞きとったり、休みや、楽器の音色にまで気付くようになる。紙面では飽足ず、踊り出す幼児や楽器を演奏しはじめた幼児も出現してくるようになる。

3-(11) 伴奏の効果を感じさせる

歌唱指導の選曲にあたっては、歌詞やメロディーの他に伴奏の効果についても十分な配慮が必要である。伴奏は、曲の表情を出すのに大きな役割を果す。従って、保育者は、伴奏はあくまでも声に添うものであることを忘れてはならない。

幼児の歌は、伴奏によって随分と助けられる。曲のイメージに合った伴奏は歌う者に実力以上の力を出させ得る。歌声と伴奏のハーモニーにより音楽が作られていることを幼児達に気付かせるような配慮が必要である。本稿3-(9)でも例にあげたように、一曲に幾つかの伴奏を準備し、比較学習によって幼児達に選択させるのもひとつの方法であろう。

3-(12) 音楽的環境における自由遊び

「音楽的環境における自由遊び」とは、音楽的な活動が展開されるであろうという予想のもとに

設定された環境の中で幼児が自由に音楽遊びをする方法である。

楽器のコーナーや、レコード鑑賞のコーナー、歌の楽譜を並べたコーナーや、身体表現のための小道具を並べたコーナーなど、幼児が音楽をしたくなるような雰囲気を設定してやらなければならない。鑑賞のコーナーには、紙とクレヨンを置いたり、曲に対するイメージを助けるような写真や実物を並べておくのもよい。歌作りのヒントになるような幼児の心を感動させるような物を飾ったり、その前に木琴や五線紙を置いて、いつでもメロディーを作り、書きとることができるようにするのもよい。楽器のコーナーには、テープレコーダーでいろいろな曲を流しておくこともよいであろう。

集団活動に、あまり参加しない幼児でも友人の目を気にせずに活動ができ、思いがけない表現をすることがある。この時の保育者の誉めことばや適切な助言が幼児の音楽的成長を大いに助けることになるのである。集団指導の時にはもつことのできない個人的なコミュニケーションも、自由遊びの時にはもつことができる。

自由に楽器に触れて演奏した経験をもつ幼児は、楽器遊びにおける楽器配分や奏法などに関して豊富なアイデアを提供してくれるであろうし、いろいろな音楽に合わせて、自由に踊る経験をした幼児は、曲想に合った表現をいつの間にか発見するであろう。メロディー楽器を手のむくまま音を出しているうちに、いつの間にか作曲できるようになるかもしれない。

騒々しく、収捨のつかなくなる時もあれば、レコードから流れる曲に合わせて全員が楽器をもち、リズム演奏をしたり踊ったりといった場面もある。「マザーグースのうた」のレコードがあるが、このレコードの伴奏として、打楽器が非常に効果的に用いられている。従って、筆者は、よくこのレコードに合わせて幼児に自由に楽器を演奏させたり踊らせたりする。歌の楽しさもあるだろうし、音楽効果のすばらしさもあるであろう、幼児達は実に創造的な表現をいつも展開してくれる。箱積木で船を作って、その中に何人かが入りこんで自由に楽器をならすグループもいる。自分の前に数個の椅子を並べ、そこにトライアングルをさげたり、タンバリンを置いたりという具合に、1人で何種類もの楽器をもって曲によって使いわける者もいる。1時間の活動の間中、床をスティックで打っている幼児もいる。グループになって気分を出して踊る幼児もいる。波に乗った幼児達は、どんどん活動を発展させていくことができるのである。週1回、1時間のこの活動を、幼児達のリクエストのまま2ヶ月程続けた経験がある。

このような、幼児の自由な活動の中から、保育者は、指導のヒントを得ることができる。このようなアプローチは、幼児の心身の発達に即した教育にとって必要なことであると考えられる。

しかし、この活動には、幾つかの問題点もある。歌や踊りに合わせてピアノを弾いてやったり、作曲したメロディーを書きとってやったりしなければならないので、助言や指導に当たる保育者の人数が少ないと十分な効果があげられない場合がある。また、自由な活動であることと、音を伴うことが、音楽的雰囲気とは程遠い、騒々しい雰囲気になることがある。従って、部屋数や保育者の配分が十分に考慮される必要がある。

積木や制作コーナーなどと同様、自由遊びの中での音楽コーナーとして設けることも良い方法

である。

4 ま と め

現代社会の加速度的な進歩にともなって、音楽教育の分野もまた、著しく発展を成しているように思われる。しかし、教育の現場においては、まだまだ数々の問題が山積している。

現代は、情報化社会ともいわれる。情報の氾濫は得ることも多い反面、教育の本質や意義を見失ってしまう恐れもある。幼児期の音楽教育においても同様である。

音楽的な環境の準備にしても、音楽の過剰は、かえって音に馴れ過ぎて、感受性を鈍らせてしまうことにもなりかねない。音楽には不可欠な音色に対する配慮は、幼児期には欠かせない重要なことである。保育者は、音楽をする主体が幼児自身であることを、まず念頭において指導に当らなければならない。そして、幼児の主体的な活動の中で音色そのものが生かされるような経験を準備することが大切である。

指導書や他の保育者の指導方法を真似ることや、指導の過程よりも結果を気にしすぎて、技術一辺倒になったり、急テンポの指導を行ってしまうことは、音楽をする主体である幼児の音楽的成長を考慮した上の指導とはいえない。

その他、幼児期に適した音楽経験を十分に考慮することなく、高度なテクニックを必要とする音楽活動も、随分取り入れられてきている。

マスコミにより、あらゆるジャンルの音楽を聞くことができる反面、マスコミ音楽をどの様に選択し、保育の中に取り入れていくかが問題となってくる。

また、多種多様の音楽を用いることが可能であるにもかかわらず、指導のマンネリ化という問題も起こってくる。

以上のような問題を解決するには、保育者による創造的な指導が望まれる。従って、まず保育者自身が、「創造性」に関して十分な認識をもつことが必要である。幼児期は、創造的な人間育成の基礎となる時期であるので、まず自己実現の創造性を目指して、指導がなされなければならない。自己実現の創造性は、すべての人間に望まれることである。従って、心身の発達に個人差が著しい幼児期においては、個々の幼児の成長に即した指導により、幼児のもつ可能性をできる限り引き出してやるのが保育者に与えられた使命である。

創造的な思考は、過去に経験した知覚を想像し、考え、感じるにより生まれてくるものである。従って、創造性の育成の為には様々な機会を捉えて、想像し、考え、感じ、行動する習慣を育てていかなければならない。創造性を育くむには、それなりの時が必要である。幼児自身のテンポの中で、或いは、適切な助言、指導のもとで、幼児のもつ機能を発揮しながら様々な発見が生まれてくるのである。

絵でいう「なぐり書き」の時代と同様、音楽においては、「情動的な活動」を十分に経験させ、幼児自身が表出する活動の中から序々に音楽的要素へと導いてやるのが大切である。

また、模倣学習の中にも、幼児自身の発見の余地が残されていなければならない。人間にとっ

て発見は、大きな喜びであり、次の活動への意欲をもたらすものである。幼児の発見は、ほんの小さなことで十分である。どの様に小さなことであろうとも、幼児自身から発せられたということが、貴重なのである。どの様に小さな発見でも、受け入れる余裕を保育者は常にもっていなければならない。

筆者は、以上のような考えに基づき、指導の現場において幾つかの試みを行ってきた。それらの試みは、まだまだ不十分なものであるが、今後も創造的な人間形成の一環としての音楽教育の立場から、「幼児の音楽教育のあり方」を研究していきたいと考えている。

参 考 文 献

- (1) ジェームス・マーセル著 美田節子訳「音楽的成長のための教育」音楽之友社 昭和46年
- (2) 国安愛子著「リズム教育」北大路書房 昭和54年
- (3) 高橋省己・田中敏隆編著「幼児の発達と指導」ひかりのくに株式会社 1974年
- (4) 岡部弥太郎・沢田慶輔編「教育心理学」東京大学出版会 1967年
- (5) 木村信之著「創造性と音楽教育」音楽之友社 昭和55年
- (6) 供田武嘉津著「音楽教育学」音楽之友社 昭和57年
- (7) 佐瀬 仁著「音楽心理学」音楽之友社 昭和47年
- (8) ロザムンド・シューター著 貫行子訳「音楽才能の心理学」音楽之友社 昭和54年
- (9) J・L・マーセル、M・グレーン著 供田武嘉津訳「音楽教育心理学」昭和47年
- (10) 川本久雄、花井清著「オルフによる音楽教育II動きの指導」東洋館出版社 昭和53年
- (11) 村山貞雄監修「幼児保育学辞典」明治図書 1980年
- (12) クルト・ザックス著 柿木吾郎訳「楽器の歴史・上」全音楽譜出版社 1978年
- (13) エルザ・フィンドレイ著 小野進訳「ダルクローズ・リトミックによるリズムと動き」全音楽譜出版社 昭和48年